

産業革命とマンチェスター：

フィクションとノンフィクションの対比

武井 暁子

エリザベス・ギヤスケルの作品の中で、マンチェスターを舞台もしくはモデルにした『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1848)と『北と南』(North and South, 1854-55)は、ジョン・ルーカスの、両作品は「産業化が労働者階級と中産階級にもたらした影響の考察である」との指摘からもわかるように(1)、工業都市マンチェスターの暗部ともいうべき、貧困、住宅の密集化、不衛生、伝染病に翻弄される労働者階級の生活を重要なテーマとしている¹。

工場労働者が人口の多くを占める都市マンチェスターは、識者の目を労働者の貧困と貧困に付随する不衛生、病、犯罪に向けさせるのに格好の材料を提供し、1830-50年代にかけて労働者階級の実態についての著作が続々と刊行された。エドウィン・チャドウィックらとともに公衆衛生運動に関わり、『マンチェスターの綿紡績産業に従事する労働者階級の道徳と健康状態』(1832, *The Moral and Physical Condition of the Working Classes Employed in the Cotton Manufacture in Manchester*, 以下『健康状態』と略記)を出版した医者であり教育者でもあるジェイムズ・P・ケイ＝シャトルワースはマンチェスターのマーケットタウンであるロッチデイル出身だった。チャドウィックはマンチェスター近郊のロングサイト出身だ。チャドウィックはイギリス全土の労働者階級の衛生状態を徹底調査し、大著『イギリスの労働人口の衛生状態に関する報告書』(1842, *Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain*, 以下『報告書』と略記)を執筆した。

マンチェスターの労働者の貧困に目を留め、活字にしたのはイギリス人だけではなかった。『メアリ・バートン』出版の3年前に刊行されたエンゲルス『イングランドにおける労働者階級の状態』(1845, *The Condition of the Working Class in England*, 以下『労働者階級』と略記)は1842年末から44年8月までの間、エンゲルスが、父親が共同出資していた工場で働くかたわら、自ら観察したマンチェスターの労働者たちの実態に基づいて執筆したものだ。

1 ヴィクトリア朝期の医療水準と伝染病の因果関係については武井 20-22 を参照。

ギヤスケルの手による『メアリ・バートン』と『北と南』はマンチェスター在住の牧師の妻であり、マンチェスターの労働者に関する描写は彼らの惨状を直接見知っていた者ならではの写実性がある。しかしながら、ギヤスケルの読者はとかく労働者階級に対する偏見と差別意識から抜けきれない中産階級であるため、ギヤスケルは読者の理解を得るため、赤裸々な描写は極力抑える必要に迫られた。ギヤスケル自身中産階級の一人であり、女性作家であるための制約もあった。本論では、ギヤスケル以前に出版された著作とギヤスケル作品におけるマンチェスターについての記述を考察し、産業革命期のマンチェスターの実像、フィクションとノンフィクションの相違、及びギヤスケルの作家としての資質を考察する。

1. マンチェスターの沿革

まず、マンチェスター発展の最大要因である産業革命について簡単に説明する。産業革命の時期については研究者により見解の相違があるものの、大まかには18世紀前半から19世紀初めにかけて進行したと考えられている。村岡健次は、産業革命のプロセスは、まず1733年のジョン・ケイの飛び杼の発明により早くから機械工業化が進んでいた綿工業に始まり、技術革新のおかげで生産性が格段に向上すると言う。そこから製鉄業と石炭業にも、同様の工業化の波が及ぶ。そして、道路が舗装され、運河の建設によって、製品を短時間で輸送することが可能になる（運河は冬季に河川が凍結すると通行不可能になり、次第に鉄道に取って代わられることになった）。さらに、イギリスは海外植民地経由で、安価で原綿等の原材料を輸入でき、自国製品を世界中で売りさばくことができた（360-67）。もっとも、G・M・トレヴェリアンが指摘する通り、海外貿易、工場、機械化といった要素はハノーヴァー朝以前から存在したのだが（371）、国内情勢、海外情勢、人的資源等多様の要因が相互に影響し、世界初の産業革命はイギリスで起こるべくして起こった。

産業革命が進展すると、工場が次から次へと建てられ、工場を中心とした工場町が形成され、工場町が集まると工業地帯となり、人が住む。このようなプロセスによる工業地帯の拡大は主としてイングランド北部で起こった。その典型がマンチェスターだ。ハドフィールドのガイドによると、マンチェスターは水上交通と他の地域からのアクセスがよいことから古くから重要拠点であった。石炭を大量に確保できたこと、水力、湿度が高い空気が繊維産業に適しており、平坦な土地は鉄道や運河の建設にも都合がよかった（877）。地理的条件、気候、資源確保などの条件に恵まれたため、19世紀初めに綿工場がマンチェスターを中心とするランカシャーに建設され、マンチェスターは工業の拠点として急速に発展した。ギヤスケルの作品の中でも、紡績工場とそこで働く労働者は重要な登場人物だ。

2. ノンフィクションのマンチェスター：シャトルワース、チャドウィック、エンゲルス

マンチェスター発展については、ピーター・ブレストンが19世紀前半、マンチェスターの重要性は正確に認識されていなかったと言う。先に述べたように、マンチェスターは早くから重要拠点であったが、1832年までは議会で代議士を選出していなかった(31)。言うなれば、歴史が古い町でありながら、マンチェスターは急成長した新興都市に特有の伸び盛りのパワーと未成熟さを持つ町だった。そのようなひずみが持てる者と持たぬ者の格差を生み出し、事業に成功した経営者は巨万の富を築くことができ、町の発展のしわ寄せはすべて末端の労働者や貧民に集中した。

先に述べたように、労働者の貧困が引き起こす種々の弊害 生産性低下、伝染病蔓延、道徳的墮落などは著述家が繰り返し論じ、世に訴え、ひいては、社会問題となった。以下、出版年順にノンフィクションでのマンチェスターの労働者たちに関する記述を見ていく。まず、シャトルワースの『健康状態』はマンチェスターでもっとも人口過密だったアンコートとマンチェスター郊外のアードウィックの診療所にシャトルワースが勤務した時の経験や衛生局の調査をもとに書かれたものだ。『健康状態』はチャドウィックの『報告書』より知名度は低いですが、重要な主張をくどいほど繰り返す、統計データによる証拠づけなどは、チャドウィックの手法を先取りしているし、著書の内容はエンゲルスにも影響を与えている。

シャトルワースは、紡績工場で働く労働者の生活スタイルについては、朝5時から夜8時過ぎまで、2回の短い食事時間をはさんで働き、ジャガイモがメインで量質ともに劣ると述べる。

The population employed in the cotton factories rises at five o'clock in the morning, works in the mills from six till eight o'clock, and returns home for half an hour or forty minutes to breakfast. This meal generally consists of tea or coffee with a little bread. Oatmeal porridge is sometimes, but of late rarely used, and chiefly by the men; but the stimulus of tea is preferred, and especially by the women.

The tea is almost always of a bad, and sometimes of a deleterious quality, the infusion is weak, and little or no milk is added. The operatives return to the mills and workshops until twelve o'clock, when an hour is allowed for dinner. Amongst those who obtain the lower rates of wages this meal generally consists of boiled potatoes. The mess of potatoes is put into one large dish; melted lard and butter are poured upon them, and a few pieces of fried fat bacon are sometimes mingled with them, and but seldom a little meat. Those who obtain better wages, or families whose aggregate income is larger, add

a greater proportion of animal food to this meal, at least three times in the week; but the quantity consumed by the labouring population is not great. The family sits round the table, and each rapidly appropriates his portion on a plate, or, they all plunge their spoons into the dish, and with an animal eagerness satisfy the cravings of their appetite. At the expiration of the hour, they are all again employed in the work-shops or mills, where they continue until seven o'clock or a later hour, when they generally again indulge in the use of tea, often mingled with spirits accompanied by a little bread. Oatmeal or potatoes are however taken by some a second time in the evening. (Kay-Shuttleworth 8-9)

ろくな食事もとらず長時間働くうちに、思考力や道徳性が低下し、家庭を顧みなくなり、放蕩に走るようになる。労働者の家庭は不衛生かつこれまたろくな食事もなく、およそ心身の安定を得られるところではない。

『健康状態』から10年後に出版されたチャドウィックの『報告書』の基本的主張はシャトルワースのそれとほぼ同様だ。『報告書』では、マンチェスターやリヴァプールもロンドンと同様重要な調査対象で、繰り返し登場する。ロンドンに住む下層労働者の劣悪な住環境についてはよく知られているが、イングランド北部工業都市の労働者の平均寿命はロンドンの労働者よりも短かった。ロバート・ウッズとニコラ・シェルトンの研究によると、1849-53年、1880年代、1890年代のイングランドとウェールズ全土の平均寿命は50、53、54歳と、概ね50代の前半を推移しているが、マンチェスター、リーズ、リヴァプール等の工業都市が集中しているイングランド北部は1861-63年の出生時の期待寿命がせいぜい39.9歳で全体の中で最も低い。さらに、イングランド北部と中部の工業都市では乳児の死亡率が1861-1900年までを通じて、他の地域に比べて際立って高かった(28-29, 48, 51)。工場労働者は農業従事者より賃金は高かったが、低水準の住環境と伝染病蔓延という点ではロンドンの労働者や貧民と変わらなかった。それに加えて、長時間労働、騒音、工場から排出される煤煙によって労働者たちは心身ともに疲弊し、結核に罹患する者が多かった。『北と南』のベッシー・ヒギンズはその典型である。

チャドウィックはマンチェスターの労働者階級では乳幼児の57%が5歳になるまでに死亡することを述べる(223)。その理由の一つが劣悪な住環境だ。次の二つの記述を例として見てみる。

'An immense number of the small houses occupied by the poorer classes in the suburbs of Manchester are of the most superficial character; they are built by the numbers of building clubs, and other individuals, and new cottages are erected with a rapidity that astonishes persons who are unacquainted with their flimsy structure. They have

certainly avoided the objectionable mode of forming under-ground dwellings, but have run into the opposite extreme, having neither cellar nor foundation. The walls are only half brick thick, or what the bricklayers call "brick noggin," and the whole of the materials are slight and unfit for the purpose.' (Chadwick 343-44)

'In Manchester I could enumerate a variety of instances in which I found such promiscuous mixture of the sexes in sleeping-rooms. I may mention one; a man, his wife and child sleeping in one bed; in another bed, two grown up females; and in the same room two young men, unmarried. I have met with instances of a man, his wife, and his wife's sister, sleeping in the same bed together. I have known at least half-a-dozen cases in Manchester in which that has been regularly practiced, the unmarried sister being an adult.' (Chadwick 192)

この記述からわかる通り、マンチェスター郊外には安普請で手抜き建築の労働者住宅が薄い壁一枚を隔てて密集し、換気設備も下水道もない。1つのベッドに成人男女が雑魚寝するのは日常茶飯事であり、不品行から性的墮落へとつながる。

最後に、エンゲルスの『労働者階級』を見てみよう。エンゲルスはマンチェスターのほぼ全域の労働者住宅の惨状を報告する。一例として、マンチェスター最大の労働者居住区であるアンコーツに関する記述を読んでみる。

But the most horrible spot (if I should describe all the separate spots in detail I should never come to the end) lies on the Manchester side, immediately south-west of Oxford Road, and is known as Little Ireland. In a rather deep hole, in a curve of the Medlock and surrounded on all four sides by tall factories and high embankments, covered with buildings, stand two groups of about two hundred cottages, built chiefly back to back, in which live about four thousand human beings, most of them Irish. The cottages are old, dirty, and of the smallest sort, the streets uneven, fallen into ruts and in part without drains or pavement; masses of refuse, offal and sickening filth lie among standing pools in all directions; the atmosphere is poisoned by the effluvia from these, and laden and darkened by the smoke of a dozen tall factory chimneys. A horde of ragged women and children swarm about here, as filthy as the swine that thrive upon the garbage heaps and in the puddles. In short, the whole rookery furnishes such a hateful and repulsive spectacle as can hardly be equalled in the worst court on the Irk. The

race that lives in these ruinous cottages, behind broken windows, mended with oilskin, sprung doors, and rotten door-posts, or in dark, wet cellars, in measureless filth and stench, in this atmosphere penned in as if with a purpose, this race must really have reached the lowest stage of humanity. This is the impression and the line of thought which the exterior of this district forces upon the beholder. (Engels 72-73)

アンコーツの特徴はアイルランド人労働者が多く住むことだ。舗装していない道路に汚物やごみが散らばり、工場からの煤煙で空気はよどみ、ぼろを着た女子供がうろついている様子をエンゲルスは「この種族こそ人類の最下層 (the lowest stage of humanity) に違いない」と断言する。

トレヴェリアンによれば、アイルランド人労働者のイングランドへの移住は18世紀に始まった。彼らの主な移住先はロンドン、マンチェスター、リヴァプール等で、イングランド人よりも賃金が安い労働者として重宝されてきた。例えば、『北と南』でソーントンでは賃金節約のため、アイルランド人労働者を雇おうとし、トラブルになる。アイルランド人の中でも最貧困層はスラムに住みついた (341, 476)。

アイルランド人や彼らの居住区に対しての詳しい描写はシャトルワースやチャドウィックもエンゲルスと同様である。シャトルワースは、アイルランド人は習慣が野蛮で、経済観念が乏しく、長時間労働の弊害とあいまって、道徳的墮落の原因となるという (12)。また、アンコーツから少し離れたメドロック河沿いは、やはりアイルランド人の居住区で犯罪の温床になっており (21)、住所不定のアイルランド人は救貧法の適用を受けることになり、行政側にとっては負担となる (32-34)。

The contagious example which the Irish have exhibited of barbarous habits and savage want of economy, united with the necessarily debasing consequences of uninterrupted toil, have demoralized the people. (Kay-Shuttleworth 12)

The population of the township [Newtown and Ancoats Districts] is 142,026; and the acts of parochial relief in one year, each continued through indefinite periods of time, were 321,172, of which acts 67,700 concerned Irish who had obtained no settlements.

The sources of vice and physical degradation are allied with the causes of pauperism. Amongst the poor, the most destitute are too frequently the most demoralized virtue is the surest economy vice is haunted by profligacy and want. Where there are most paupers, the gin shops, taverns, and beer houses are most numerous. (Kay-Shuttleworth 34)

アイルランド人を問題視したのはチャドウィックも同様だった。彼は、グラスゴーとレディングでもアイルランド人の貧民は軽蔑の対象で (199, 338), 町の中でも最下層の区域に住むと述べている (92, 93)。

言うまでもないことだが、シャトルワースとチャドウィックは行政側の人間だ。彼らが労働者階級の調査を行い、実情を報告するのは、現状のまま放置しておく、労働人口が減少し、海外との競争で負けることと、伝染病予防による経済効率を考えてのことだ。つまり、彼らにとって、労働者は監視し、教化する存在である。エンゲルスは、シャトルワースやチャドウィックと違い、労働者に意識改革を呼びかけているが、あくまでも一定水準以上の者に限ってという条件付きだ。シャトルワース、チャドウィック、エンゲルスにとって、労働者階級は共存するべき存在ではなく、あくまでも「他者」なのだ。

3. 『メアリ・バートン』：貧困と病気の因果関係

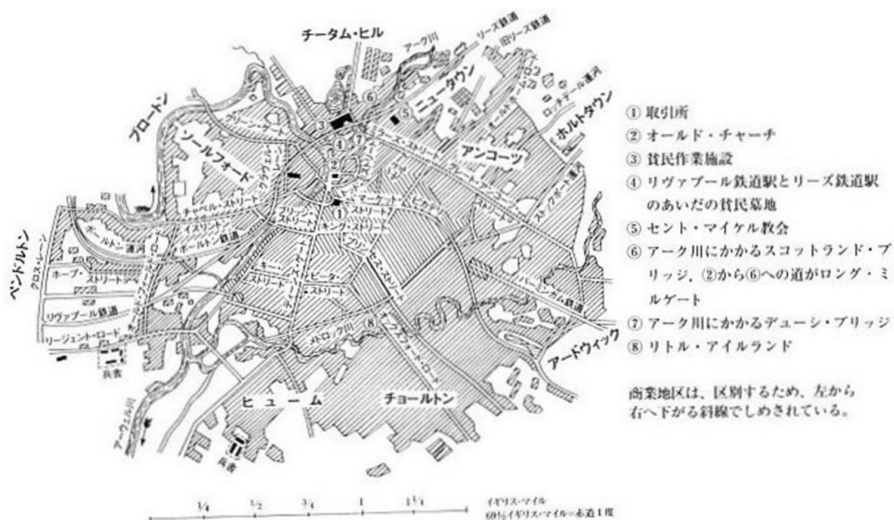
『メアリ・バートン』と『北と南』が出版された時期は、チャドウィック、エンゲルスの労働者の悲惨な状況に関する大作の出版の後だ。1845年に刊行されたエンゲルスの『労働者階級』はドイツ語で書かれていたため、ギヤスケルが読んだのかは不明だが、チャドウィックやシャトルワースの著作を読んでいた可能性は大いに考えられる。ギヤスケルの労働者の描写には先行テキストに対する賛同や批判を読み取ることもできよう。

まずは、『メアリ・バートン』から読んでみよう。引用は第6章で、ジョン・バートンとウィルソンがダヴンポートを見舞う場面である。

"No, stupid, to be sure not. Going to see the chap thou spoke on." So they put on their hats and set out. On the way Wilson said Davenport was a good fellow, though too much of the Methodee; that his children were too young to work, but not too young to be cold and hungry; that they had sunk lower and lower, and pawned thing after thing, and that they now lived in a cellar in Berry Street, off Shore Street. Barton growled inarticulate words of no benevolent import to a large class of mankind, and so they went along till they arrived in Berry Street. It was unpaved; and down the middle a gutter forced its way, every now and then forming pools in the holes with which the street abounded. Never was the old Edinburgh cry of "Gardez!'eau!" more necessary than in this street. As they passed, women from their doors tossed household slops of every description into the gutter; they ran into the next pool, which overflowed and stagnated. Heaps of ashes were the stepping-stones, on which the passer-by, who cared in the least

for cleanliness, took care not to put his foot. Our friends were not dainty, but even they picked their way, till they got to some steps leading down to a small area, where a person standing would have his head about one foot below the level of the street, and might at the same time, without the least motion of his body, touch the window of the cellar and the damp muddy wall right opposite. You went down one step even from the foul area into the cellar in which a family of human beings lived. It was very dark inside. The window-panes, many of them, were broken and stuffed with rags, which was reason enough for the dusky light that pervaded the place even at midday. After the account I have given of the state of the street, no one can be surprised that on going into the cellar inhabited by Davenport, the smell was so fetid as almost to knock the two men down. Quickly recovering themselves, as those inured to such things do, they began to penetrate the thick darkness of the place, and to see three or four little children rolling on the damp, nay wet brick floor, through which the stagnant, filthy moisture of the street oozed up; the fire-place was empty and black; the wife sat on her husband's lair, and cried in the dark loneliness. (Gaskell, MB 66-67)

汚水があちこちに水たまりを作る舗装していない道路，散乱した汚物，悪臭，息がつまりそうな地下室，ぼろを着た女子供はエンゲルスのアンコーツの描写とほとんど同じだ。この点に関しては，松村昌家の「ダヴンポートというのはケルト系の名前であることから彼はアイルランド移民の末裔であり，彼の住まいはメドロック河沿いのリトル・アイルランドというスラムだ」(51)



マンチェスターとその郊外の図

との推測は説得力がある（地図参照）。ギヤスケルの夫は牧師であり、ギヤスケルも夫に同行して貧民街への慰問をしていたので、ギヤスケルがこの地域の様子を熟知していたであろう。

松村はエンゲルスに比べて、ギヤスケルのマンチェスターのスラム街の描写は中流階級の読者に配慮したため、控え目と言う（52）。先に述べたように、エンゲルスはアンコーツの住人に対して、「最下層に違いない」（73）と軽蔑や不快感を露わにする。一方、同じ労働者同士の連帯感ゆえと言うことは出来ようが、パートンとウィルソンは自分たちも困窮しているにも関わらず、ダヴンポートたちに食料を買い、親身になって看病してやる。ダヴンポート夫妻も困窮しているが、救貧院の世話になるよりは自活を選ぶ気骨のある人間として描かれている。ダヴンポートの葬儀は質素でありながら粛々と執り行われ、きちんと喪服を着たダヴンポート夫人は毅然としていて、シャトルワースたちが批判する墮落した最下層の人間とは大違いだ。もちろん、中産階級の読者の共感を得るためには、ギヤスケルはダヴンポート一家を困窮の果てに墮落した人間には設定できなかったのだろうが、ギヤスケル作品の根幹を成す性善説の好例である。

4. 『北と南』：大気汚染問題

貧困と不衛生と並び、工業都市の危険因子は大気汚染だ。『メアリ・パートン』出版から6年後に執筆開始された『北と南』の主人公マーガレット・ヘイルは元国教会牧師の娘であり、労働者の困窮をメアリより客観的に見られる立場にいる。北はマンチェスターをモデルとした工業都市ミルトンを表わし、南とはすなわちマーガレットの故郷の田舎町ヘルストンである。ミルトンとヘルストンの対比が表わすように、『北と南』は階級間格差に加えて、都会と田舎の環境間格差も重要な問題である。『メアリ・パートン』では労働者の貧困と病気の因果関係がリアルに描かれたが、『北と南』では労働環境の劣悪さのほうが問題視されており、ギヤスケルの視点がより社会性を持ったものになっている。

ミルトンはダークシャー（Darkshire）という架空の州の一画にあるが、町のたたずまいはまさに「黒（ダーク）」である。次の引用は7章でヘイル一家がミルトンに近づいたときの様子だ。

For several miles before they reached Milton, they saw a deep lead-coloured cloud hanging over the horizon in the direction in which it lay. It was all the darker from contrast with the pale gray-blue of the wintry sky; for in Heston there had been the earliest signs of frost. Nearer to the town, the air had a faint taste and smell of smoke; perhaps, after all, more a loss of the fragrance of grass and herbage than any positive taste or smell. Quick they were whirled over long, straight, hopeless streets of regularly-built houses, all small and of brick. Here and there a great oblong many-windowed factory

stood up, like a hen among her chickens, puffing out black 'unparliamentary' smoke, and sufficiently accounting for the cloud which Margaret had taken to foretell rain. (Gaskell, NS 59)

マンチェスター市内の工場から立ち上る煤煙に対し、何ら対策が取られなかったことは例えば1860年にオックスフォードストリートの紡績工場を描いたイラストにも見られる（イラスト参照）。この引用で描写されている黒煙はまぎれもなく典型的な公害だが、当時はよくも悪くも自由放任主義が横行し、法は何ら強制力を持たなかった。この点について、プレストンはマンチェスター発展を支えたのはソーントンのような個人の起業家であったため、政府にほとんど規制を受けることなく町が発展したためと解説する（31）。

『北と南』のベッシー・ヒギンズの肺結核感染は紡績工場の換気設備の不備が原因であり、いわば労働環境の犠牲者である。ベッシーは、母親の死後工場で働き始めた時から健康が衰えたこと、工場内での騒音と換気設備の不備をマーガレットに訥々と話す。

'I think I was well when mother died, but I have never been rightly strong sin' somewhere about that time. I began to work in a carding-room soon after, and the fluff got into my lungs and poisoned me.'

'Fluff?' said Margaret, inquiringly.

'Fluff,' repeated Bessy. 'Little bits, as fly off fro' the cotton, when they're carding it, and fill the air till it looks all fine white dust. They say it winds round the lungs, and



Harwood and Mcgahey, *Mills, Twist Factory, Oxford Street, Manchester* (1860)

tightens them up. Anyhow, there's many a one as works in a carding-room, that falls into a waste, coughing and spitting blood, because they're just poisoned by the fluff.'

'But can't it be helped?' asked Margaret.

'I dunno. Some folk have a great wheel at one end o' their carding-rooms to make a draught, and carry off th' dust; but that wheel costs a deal o' money five or six hundred pound, maybe, and brings in no profit; so it's but a few of th' masters as will put 'em up; and I've heard tell o' men who didn't like working places where there was a wheel, because they said as how it mad 'em hungry, at after they'd been long used to swallowing fluff, tone go without it, and that their wage ought to be raised if they were to work in such places. So between masters and men th' wheels fall through. I know I wish there'd been a wheel in our place, though.' (Gaskell, NS 102)

たどたどしくはあるが、ベッシーは、『北と南』連載時に、マンチェスターの工場労働者たちが置かれた労働環境の真実を語る。ヴィクトリア朝前半において、肺結核は成人の死因の首位を占めた伝染病だった(22)。ベッシーのような工場労働者がとりわけ肺結核にかかりやすかった理由は、工場内に浮遊するちりとほこりで肺を冒されやすかったこと、栄養失調で病気への抵抗力が弱かったこと、狭い工場内は伝染が速く、しかも長時間労働だったこと、そして、ベッシーの語りからもわかるように工場主たちが換気対策を講じなかったことである。肺結核はキーツ、ブロンテ姉妹、シヨパンらの芸術家が罹患したこともあって、小説や音楽作品等で往々にしてロマンティックなイメージを付与され、美化される傾向があった²。だが、ギヤスケルは上辺にごまかされず、肺結核は、労働者たちの貧困、工場主たちの無責任、有名無実な法が複合的に関連して発生する、いうならば社会的要因によって引き起こされる病であることを描く。

ベッシーは臨終に際し、マーガレットに感謝の言葉を伝え、酒飲みの父親に酒を飲ませないでとの言葉を残す。一方、父親のヒギンズは酒を飲みに行っているため娘の臨終にも立ち会わず、ベッシーの死後も酒を飲みに行こうとし、マーガレットに悪態をつくといった有様で父親失格の典型だ。しかし、ヘイル氏と話し合ううちに気持ちが落ち着き、衣服を整えて別人のようになる。このヒギンズの道徳的覚醒の意味については結論で述べる。

5. 結論

このように、マンチェスターが工業都市ゆえに抱える問題に関する描写を読んでみると、著者

2 ヴェルディ『椿姫』(La traviata, 1853)、プッチーニ『ラ・ボエーム』(La bohème, 1896)など。

たちそれぞれの立場が見えてくる。シャトルワースとチャドウィックは行政側の人間であり、労働者は観察、調査、管理の対象だ。二人は、労働者の向上のために、住宅設備を整え、子供たちの教育の必要性を説く。その際、まず労働者の生活環境や道徳を向上させることから得られる経済上のメリットを説き、経営者や教区の理解を得ようとする。それに対し、エンゲルスはドイツ人であるため、イギリスの富裕層とのしがらみは少なく、より直截に持てる者の搾取を弾断できる立場にある。彼が目指したのは労働者に恩恵を施すことではなく、労働者の意識向上だった。

その中であって、ギヤスケルはエンゲルスよりは控えめだが、工場主の不見識と労働者の困窮との間に因果関係があることを読者に理解させる。ただし、ギヤスケルは、マンチェスターの貧困、病気、大気汚染といった都市問題をリアルに書くことはできても、先に指摘したヒギンズの瞬時の道徳的覚醒に見られるように、困窮した労働者が陥る道徳的墮落に対する描写がリアリティを欠くくらいが往々にしてある。この点については、中流階級の読者受けを考えてのことと考えることも出来るし、またルーカスの「ギヤスケルはある意図を持って理論はもちろんのこと、歴史を書くのを決して望まない」(15) とのコメントが一応の解決にはなろう。しかし、フィクションとノンフィクションの違いと言ってしまうればそれまでだが、ギヤスケル作品に一貫する性善説は、例えばディケンズのように、犯罪心理や道徳的墮落といった人間のネガティブな側面を突き詰めて書くことができないという欠点にもつながる。『メアリ・バートン』と『北と南』におけるマンチェスターとそこに住む人の描写からはこのように表裏一体となったギヤスケルの長所と短所が見える。

年 表

1733	ジョン・ケイ、飛び杼 ^ひ 發明
1764	ハーグリーヴズ、ジェニー紡績機發明
1769	ワット、新型蒸気機関發明
1771	アークライト、水力紡績機發明
1779	クロンプトン、ミュール紡績機發明
1785	カートライト、力動機發明
1800	チャドウィック誕生 (-90)
1804	ケイ=シャトルワース誕生 (-77)
1810	ギヤスケル誕生 (-65)
1814	スティーヴンソン、蒸気機関車試運転成功
1820	エンゲルス誕生 (-95)
1830	リヴァプール=マンチェスター鉄道開通
1832	ケイ=シャトルワース『マンチェスターの綿紡績産業に従事する労働者階級の道徳と健康状態』
1842	チャドウィック『イギリスの労働人口の衛生状態に関する報告書』
1845	エンゲルス『イングランドにおける労働者階級の状態』
1848	ギヤスケル『メアリ・バートン』
1854	ギヤスケル『北と南』(-55)

* 本論は日本ギヤスケル協会第 24 回シンポジウム (2012.10.6, 於中京大学) で発表した原稿に加筆したものであり, 平成 25 年度科学研究費補助金の成果である。

参考文献

- Chadwick, Edwin. Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain. 1842. Ed. M. W. Flinn. Edinburgh: Edinburgh UP, 1965.
- Engels, Friedrich. The Condition of the Working Class in England. 1845. Ed. David McLellan. Oxford: OUP, 1999.
- Gaskell, Elizabeth. Mary Barton. 1848. Ed. Edgar Wright. Oxford: OUP, 1987.
- . North and South. 1854-55. Ed. Angus Easson. Oxford: OUP, 1982.
- Hadfield, John, ed. The Shell Guide to England. 1970. London: Book Club, 1979.
- Kay [-Shuttleworth], James Phillips. The Moral and Physical Condition of the Working Classes Employed in the Cotton Manufacture in Manchester. London, 1832.
- Lucas, John. The Literature of Change: Studies in the Nineteenth-Century Provincial Novel. Brighton: Harvester, 1977.
- Preston, Peter. "Manchester and Milton-Northern: Elizabeth Gaskell and the Industrial Town." Writing the City: Eden, Babylon and the New Jerusalem. Ed. Peter Preston and Paul Simpson-Housley. London: Routledge, 1994. 31-57.
- Trevelyan, G. M. English Social History: A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria. 1944. London: Book Club, 1977.
- Woods, Robert, and Nicola Shelton. An Atlas of Victorian Mortality. Liverpool: Liverpool UP, 1997.
- 武井暁子「産業革命の大いなる遺産と自由への渴望」。武井暁子, 要田圭司, 田中孝信編『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』。音羽書房鶴見書店。2013。13-38。
- 松村昌家「貧富 マンチェスターの二つの国民」。松岡光治編『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化 生誕二百年記念』。広島: 溪水社。2010。47-64。
- 村岡健次「第 4 部 ヴィクトリア朝イギリスの光と影」。谷川稔他『世界の歴史 22 近代ヨーロッパの情熱と苦悩』。中央公論新社。1999。339-499。